

中学生・高校生の部

# 入賞作品

箱 ..... 馬渡 愛莉

鬼 ..... 藤崎 奏多

風、香る ..... 金丸 千夏

焼け野原 ..... 守田 葉梨

ばあちゃんの畑 ..... 南 龍之輔

本当は ..... 内村 真彩

大好きなふるさと ..... 萩野 成美

故郷の景色 ..... 平田 友華

ふるさとのような人 ..... 佐藤 元美

ただいま ..... 川野くるみ

## 箱（文部科学大臣賞）

宮崎県 宮崎県立宮崎商業高等学校 二年 馬 渡 愛 莉

まっくらだった。

どこを見てもまっくらだった。

瞳の奥を閉ざされたまま

せまく凍った黒い箱の中で

手を伸ばすことさえできないまま

誰も目を向けることのない場所に

置き去りにされていた。

まっくらだった。

ずっとまっくらだと思っていた。

いつからだろう。

「変わらない」日々が「変わった」のは

黒に包まれた私の箱に色がついたのは



落ちていた箱を見つけてくれたのは  
そつと手を差し伸べてくれたのは

まっくらだった。

昨日も今日も同じだと思っていた。

差し伸べてくれた手を握り

指先から伝わる温かさ

そこから感じるぬくもり

そのすべてが初めてだった。

色があった。

いつも一緒だった田んぼ道

家の隣のビニールハウス

古いポロポロの自販機にだって

その色に気づけた時

「変わる」

---

そう思った。

その時にはもう

水が滴っていた私の箱の下から

小さな希望が芽生えていた。



鬼  
(国民文化祭実行委員会会長賞)

宮崎県 宮崎市立宮崎西中学校 一年 藤崎 奏多

十歳の僕

パンで言ったら

食パンくらしいの家に住んでいる

午前中 鬼とたたかうアニメを見てたら

勉強しろと父におこられた

チキンカツ入りカレーライスを食べ終え

ラクダ公園に行く

そこにはいつも友達がいる

公園ぜんぶをつかって

みんなで鬼ごっこをする

むかし黄色だったラクダは

いまはピンク色のラクダ

---

その前でじゃんけんをする

パーで勝った僕は

草の長いところを走りまわる

鬼になった友達に足が速い

タッチされる寸前で

僕はしゃがんでよける

鬼はずっと追いかけてくるから

僕は猫みたいに走って逃げる

息があがってきたら

ラクダのおなかの中にかくれる

まるい穴の中にひとりうずくまると

息をする音 心臓を打つ音

頭からあごにつたっていく汗

足もとには長いアリの列

アブラゼミの鳴き声がうるさい

友達が 鬼が 土をけって走ってく音



近づいたり 遠のいたり  
鬼はどこまでも追いかけてくる

僕は中学生になった

夏が来た

やっぱりうるさいセミの声

あの鬼は 今ごろ

だれを追いかけているのだろうか

## 風、香る（宮崎県知事賞）

宮崎県 宮崎県立宮崎商業高等学校 二年 金丸千夏

風が吹く 私は私で景色に触れる

陽の光、電車の音、草花の香り、

そして麦茶を一口、風と飲み込む

広い小さな草地の上で私は私で景色に触れる

ひきどをあけて ぞうりをぬいで

「おかえり」という ねこに「ただいま」

ちゃぶだいをかこんで「いただきます」

つめたいそうめんが つるつるながれて

むぎちゃもながれて「ごちそうさま」

せんぷうきとふうりんが かぜをはこんで

おにいちゃんとおねえちゃんのプリント

ねむるわたしとおとうとのうえをおよぐ





ペンのはしるおとで セミのこもりうたで

風が吹く 開いた目をかすむ風

五感で触れた懐かしい場所

傾けた水筒の からん、と響く音

広がった草地はいつのまにか小さくなって

思い出の形はもう無くて

小さな小さなふるさとに「さよなら」をして

よく通る風に背中を押されながら

みんなが待つ おうちへ帰る

# 焼け野原（宮崎県教育委員会教育長賞）

宮崎県 宮崎県立宮崎商業高等学校 一年 守田葉梨

かつての焼け野原一面に漂っていた何かが焼け焦げた臭いは 排気ガスの臭いの中に消えていき

あの海に映っていたたくさんの戦艦の影は

工場排水に呑み込まれ

空を飛び回っていた戦闘機は 工場の煙におおわれて見えなくなり

人々が流した涙は「国の発展」という言葉に吸い込まれ しばらくたって多くの有

害物質と共に日本中に染み出していった

そして 私達の声は 気持ちは今も昔も

「お国のため」という言葉に押し潰されて

消えていくのだろう といっていたおじいちゃん

今は違うよ

かつて空に漂っていた排気ガスの臭いは

タバコとお酒の匂いに変わって



工場排水に呑み込まれた戦艦とその影は

ミサイルに姿を変えて たまに海の上に影を落とすの

煙におおわれて見えなくなった戦闘機も

大気を汚染している化学物質に負けじと空を飛ばうとしているし

有害物質と共に日本中に染み出した涙は

別の所から来た未知のウイルスによって

溢れてしまいそうな位蓄積されているし

「お国のため」という言葉に押し潰されて消えていったおじいちゃんたちの気持ち  
や言葉も 今は「国民のみなさんのため」という言葉に私たちの声や気持ちと一緒に  
丸め込まれて きっと無視されてしまうから

かつての焼け野原一面に漂っていた何かが焼け焦げた臭いがまた心の中にじわじ  
わと広がり始めている

ばあちゃんの畑  
(第35回国民文化祭宮崎県実行委員会、  
第20回全国障害者芸術・文化祭実行委員会会長賞)

沖縄県 石垣市立石垣第二中学校 二年 南

龍之輔

思わず「ヤッホー」と叫びたくなる

広い畑には パイナップルやサトウキビ

ゴーヤにパイヤにへちま

何でもある

ばあちゃんの畑には

いろんないきものが

遊びに来る

アカシヨウビンにカンムリワシ

オオゴマダラにアゲハチョウ

イノシシやクジャク

自然の動物園



そして植物園

動物だけじゃない 人も集まる

ばあちゃんが畑にいると

ばあちゃんに会いに来る

多めに収穫した野菜をおすそ分けする  
他の料理に化けてくる

ほくのばあちゃん

体も大きい

力持ち

心が広い

家族みんなでの

畑仕事はたまにしかできないけれど

ほくの「ふるさと」のイメージ

ばあちゃんと畑

# 本当は (宮崎市長賞)

鹿児島県 鹿児島市立坂元中学校 三年 内村真彩

本当は 気楽に生きたい

本当は 嫌なことも忘れて笑いたい

本当は ずっとずっと遊んでいたい

本当は ありのままでいたい

「本当は」を隠している君は

誰よりも素敵でかっこいい

私にとって 一番星みたいに

輝き続け光をくれる

だからこそ私は思う

本当は ずっと無理をしているかも

本当は 笑顔でも辛い時があるかも



本当は 私が知らないところで  
たくさん泣いているかも

いつも「大丈夫」と笑って強がる君を

いつも私は 見てるから

いつの日かぼろつと言った

「本当はすごく弱いんだ」

悔しそうに話す君を

ずっと支えて 守っていききたいと思う

支える、守りたい、なんて

私も強そうに言っているけれど

本当は

君を見守ることしかできない

小さくて弱い、人間なんだ

---

# 大好きなふるさと（宮崎市教育委員会教育長賞）

宮崎県 宮崎県立宮崎商業高等学校 一年 萩野成美

耳をすましてみれば虫の鳴き声

まわりをみわたせば山

私が住んでいるふるさとは

電車すら通っていない

でも、たくさんの方の笑顔が

毎日見られる

学校に登校する時だって

地域の人は

「おはよう」ではなく「いってらっしゃい」

学校から帰る時だって

「おかえりなさい」





まるで家族のようだ

私の家から少し離れてみれば

一面畑が広がっている

そこには私の祖父・祖母の畑もある

夏休みになるとよく行く場所だ

そこは肥料のにおいがただよっている

牛小屋だっている

私はこの場所が好きだ

たとえ電車やショッピングセンターがなくなっても

私はふるさとが好きだ

数年後、ふるさとを出てしまったとしても

いつか戻りたい

そして、子供だった私に

生まれかわりたい

## 故郷の景色

（第35回国民文化祭、第20回全国障害者  
芸術・文化祭宮崎市実行委員会会長賞）

宮崎県 宮崎県立宮崎商業高等学校 二年 平 田 友 華

坂道がある。一本の長い長い坂道。

どんな坂道かって？細くて、急で、歩道すらない、本当に道なのかってくらいの坂道。そんな坂道を登るのは、危険だし、正直、とても怖い。でも、私は、登ることを止めない。だってそこからしか見えない景色があるから

一面に広がった田んぼや緑。黄色い花たちが見えるのどかな景色

のほりきった後に見えるこの景色は、何度見ても、あきない。季節によって、表情もころころと変わっていく。それもまた、おもしろい。毎回、毎回、足を止めて、見いってしまうその景色は私のふるさとの象徴だ。



ふるさとのような人（日本現代詩人会会長賞）

宮崎県 宮崎県立宮崎商業高等学校 一年 佐藤 元美

宮崎を色でたとえると 様々な天然色

明るくて 華やかなで 鮮やかで 元気になれる

空は つきぬけてくような 澄みきった青の色

堀切峠の海は 淡いエメラルド

田んぼの色は 深くて濃い 緑の色

きらきらかがやく 太陽の下

赤く、燃えるような情熱を持つ人になりたい

この青空のように、寛容な心で人と接する人になりたい

草木のような、いつでも穏やかで 人の心を癒す人になりたい

人も街も温かく優しい この宮崎で生まれていく私は どんな色を持った人になるのであろう

## ただいま（日本詩人クラブ会長賞）

宮崎県 宮崎県立宮崎商業高等学校 一年 川野 くるみ

「地方は人が暖かい」

暖かさに慣れると、冷たさの耐性は自然に弱まる。私が、そう思っているだけかもしれないけれど。

朝皆はそれぞれの場所に行き、指示をされて行動する。褒められたり怒られたりして、夜には皆眠る。それを繰り返して老いていく。

繰り返すだけでは飽き、人は様々な行動を始める。恋愛、反抗、対話、虐め。矛盾ばかりの社会で人は生活し始めていく。

「感情なんて要らなかったものを」

或る人はそう言った。感情があるから社会は矛盾だらけになるんだと虐められていたその人は言った。その人が学校に来ることは以降一切なくなった、まだ中学生だったのに。

…じゃあ、感情って何なんだ。



自己満足、愛想をつく、自分を偽る、馬鹿にする、それともただの嫉妬——「感情」だけでもまるで統一性はない。当たり前だ。

自転車を止め、玄関の前に立つ。何故か、この瞬間はいつも体が強張る。思い切り扉を開ける。

「おかえり」

ただ、それだけの言葉。口角を上げ笑顔をつくる家族。嬉しいのか照れくさいのか、胸から何かがこみ上げる。

嗚呼、多分。上手く言い表せないけど。

「心の故郷」とは、ことういう事。